

マスコミの未来

——新聞・テレビは真実を伝えているか

田畑彦右衛門

マスコミを見る目

今日は私に与えられたテーマは『マスコミの未来』ということがあります。普通マスコミというよりも、我々はジャーナリズムというふうに呼んでおります。このジャーナリズムというのは何か。これはいろいろ難しいのですけれども、一つ言えば、時事的な事実の報道、それから評論を伝達する社会的な活動だ、と言われております。初めてジャーナリズムが生まれた時は、新聞とラジオしかありませんでした。そういう時代から私はずっと四十年、NHKで勤めてきました。その間、どんなメディアが変わり、昨日もCS衛星を使った放送が出来、これからは、そういうデジタルと多チャンネルということですね。この昨日出来ましたチャンネルなどは、六十三の放送が出来る。行く行くは一二十幾つのチャンネルを持つようになるというのですから、これはもう大変なことでありまして、もうNHKだけしか聞いていなかった時代にNHKに入り、それで民放

が出来、いろいろなものが出来という中で見ますと、本当に技術の進歩というのは、マスコミのあり方もまた変えているというふうに私は思うのです。

そういうわけで、今日は「新聞あるいはテレビは真実を伝えているか」というテーマでお話しします。それらの善意とか悪意とかいうことは別にして、今のマスコミは本当に真実を伝えるかというところ、伝えていない場合もあるのです。

それは何かといいますと、例えば昨日国会で橋本総理大臣が「企業の一つや二つ倒れてもしょうがない」と言ったと新聞には大きく出ました。もっと言うと、「北海道拓殖銀行あるいは山一證券が倒れた。また今倒れるところがあっても、これはもうやむを得ないのだ」、こういう意味で言ったのだらうと思います。ところが、橋本さんは「私はそんなこと全然言っていない」と昨日、国会で言っていました。「あれっ」と思いました。だって朝刊にデカデカと出ているのですよ。それを本人が、私は一言もそういう事を言っていない

いというふうに言っているのです。

これはなぜかといいますと、一つは対談した宮沢元総理の発表の中にあったのか、あるいはどこかほかで橋本龍太郎さんが言ったことがそのまま新聞に出てしまったかということですが、総理大臣になりまして、もう寝ている間以外は全部新聞記者がくっついて歩いているのです。もうどこへ行くのも新聞記者がくっついて歩いていて、今何言った、ここではどういことを言った、ここでは結婚式のお祝いでこういうことを言ったと、全部メモしているわけです。

そこまでは当たり前なのです。ところが、それが総理大臣の話が終わりまして、各記者が全部集まって、今言ったことを確認するという作業をするわけです。それは政治家というのは、訳の分からぬことを言うわけですね。あれも一つの上げ足を取られないための手段ですけれども、それでも一体あの言葉の意味は何だということを見んがが集まって相談して、それで記事を作ります。ですから、この社も同じ記事になるのは当たり前ですね。で、誰か一人が「あの言葉は、大きな会社が潰れてもいいということや」ということを言うと「ああ、そうそう」ということでみんなが書くわけです。ですから、ああいう制度がある以上は、本当に本人の言葉がその通り伝わるかどうかということは分からない状況の中にあるわけです。

もう一つ申しますと、先日あの山梨県の大月市で回送列車が特急あずさにぶつかって、まる一日ぐらい汽車が止まる大変な事故がありましたけれども、私は最初の一報を見た時に、ああこれはこの運転手が嘘を言っていると思いました。運転手が嘘を言っているというのにしないで、とにかくA.T.S.がどうだった、信号機がどうだ

ったかというために、あれだけになったのですね。それで連続して、各社の記事が載りました。あれはなぜかという、これは十月十二日の出来事だったので、地元の山梨日日新聞というのは、十三日が山梨日日新聞の休刊日だったわけです。自分のところであんな大きな事故が起きているのに、明るる日休みなのです。その一日遅れを取り戻すために、山梨日日は連日のごとく、事故のことを何から何まで全部書いて、大きく書いたものだから、ほかの新聞社もそれにつられて記事が大きくなる。ようやく昨日になって、あれはもうも運転手がA.T.S.を入れていなかったということが分かったのです。それは初めから分かっていることなのです。それを一ヶ月近くも放っておいたというのは、そういうことがあるわけです。

ですから、マスコミというのは、皆さんが新聞を見たり、テレビを見たりしている間は、全部本当のことを言っている、まあ本当のことには違いないのだけれども、それは極一面しか伝えていない。読む方の側からすれば、記事を読んで、その記事の内容が本当であるかどうかということを見極めるだけの力というものが必要されるというのが現代ではないか、こういうふうに思うわけです。

そこで、考えてみると今マスコミと言われているものは、新聞があり、雑誌があり、テレビがあり、あるいはこの頃随分増えてきたミニコミがあります。一度に不特定多数の大勢の人を対象に流すのをマスコミ、と呼んでおりますけれども、その中で前にお話しした点については特にテレビの分野において変わってきているという点なのです。

社会の変革の中で

新聞は技術的には印刷であり、その印刷したものを配達するといふ意味では、昔も今も変わりません。けれども、テレビは本当に変わりました。

そういう中で、今日日本は大きく変わろうとしているのです。北海道拓殖銀行が潰れた、大きな銀行でもまさかあんな銀行がと思つたところが全部潰れてしまつてゐるわけなのです。ところが、そういうふうには世の中が大きく変わろうとする時には、今までの価値観でもつて測りしれない程力が動くのです。これを言いますと、近代社会になつてから、日本が大きく変わったのは、明治維新、それから昭和二十年の終戦、そして今なのです。この三つは日本が大きく曲がり角を曲がろうとしている時なのです。

明治維新といふのは、日本が近代国家になる一つの象徴でありました。だから今までのあらゆるものが否定されたわけですから、まず侍といふのはなくなりましたね。侍がなくなると、侍の中で失業する人が何万という程出るわけです。今山一でも関連会社を含めて一万人が職を失うと言つていますけれども、それどころでなく全ての人が失業したのです。そこから教育といふのは始まつた。明治五年に学制発布があつて、明治政府が出来ました。ところが、明治政府は日本をいち早く近代国家にするために無理をしたのです。それは富国強兵といつて、とにかく国に富を集めて、強い兵隊を作るといふことでずつとやつていつたのです。それが明治三十八年の日露戦争に勝つた時から、世界中が日本を見直して、それ以来日本は先進国の仲間入りをしたのです。ですから、明治維新からおよそ四十年の間といふのは、日本は発展途上国の一つに過ぎなかつたのです。それでも、あらゆる制度を変えて、天皇制といふのを表に出してやつて

きたのです。そしてその富国強兵制度が行き過ぎて、昭和二十年に世界中から袋叩きにあつて戦争に負けたわけですから、何が起つたかといふと、今度は日本の民主化ということが起こつたわけですね。明治維新は、日本の近代化、昭和二十年終戦は日本の民主化ということでありました。これは結構なことですが、男女同権になつた。これはいいことですね。女性も選挙権が与えられた、これもいいことです。けれども、まあ労働組合が出来たとか、あるいは農地が全部取り上げられて、みんなに農地を渡した。これも農地解放という点では民主化でありましたけれども、今日になってみると、あまりにも地主が多いために、公共事業というのは非常にやりにくくなつてきた。それからお金も掛かるようになってきたということがあります。

この間私はフランスへ行きました。シャルル・ドゴール空港といふ四千米滑走路が二本もあるような大きな空港です。ものすごく広いのです。それで「こんな広いところ開発するのは大変だつたらうね、一体何人地主がいたんだ」と聞きました。すると向こうの人は「この地主は三人です」、それだけでも日本ならあれだけの土地だつたら何百人、何千人という地主なのです。それを一人一人潰して行かなければいけないところに、日本では公共事業がなかなか進まない。しかも、公共事業のほとんどが工事費よりも土地の買収ということにほとんど税金を使つてゐるというようないふことがあります。

それから終戦後は、公職追放といつて、今までいろいろなところで重要な地位についていた人が、公職追放といふことで全部追放されたのです。ちょうど今いろいろの会社社長の社長が次々に辞めており

ますけれども、あれも一種の公職追放なのです。あの人は別にその破廉恥な悪いことをしたわけではない。今までの業界の通例に従って、総会屋に金を出したというようなことをやっていた。あの海の家などというのは、私達から言うとうと、総会屋にしてはうまいことを考えたな、罪にならないように海の家を使ってもらって、そこへ金を入れるというようなことは、本当にうまいやり方だなと、思ったのですが、それも罪になった。今もまたそういう公職追放が広がっているわけです。

で、そういう中で六・三・三制、今日の教育制度も発足したわけです。この六・三・三という制度は、いいところもあるけれども、今日になってみれば悪いところもあるわけです。そこで中曽根総理大臣の時に、臨教審というのを作って、その臨教審でやろうとしたのです。それは何をやろうとしたかというと、学校を自由化しようとしたのです。ところが、教育業界というのは、もうそれはそういうことになりますと、学校も、文部省も、日教組も、塾も、全部一枚岩になって反対したために、あの臨教審の時は何もそういうことを出すことは出来なかったのです。

で、詳しく言うと、一九八五年、昭和六十年にプラザ合意というのがございました。これは覚えていても多いと思います。そのプラザ合意では、一つの今の円高ドル安というのはその時に始まったのです。前の晩までは一ドルが二四〇円だったのがあつたという間にドル安になり、今大体一九九円ぐらいで収まっていますけど、一時は八〇円を切ったことがあった。八〇円という二四〇円の三倍ですよ。それだけ日本の経済が発達をして、いろいろな世界から認められるというふうになったわけです。

私は昭和三十年にNHKに入ったのですが、昭和三十年というところ経済白書が「もはや戦後ではない」、こういう有名な言葉を書きましたけれども、それから高度成長、オイルショック、オイルショックからまた立ち直る、今度はバブルだということで、本当にこの四十年というのを目まぐるしい四十年を過ごしたわけでありました。そういう目で見ると、このバブルというのは一時的なものだ、こういうふうには私たちが思ったのです。でも、皆さんは恐らく昭和五十年から後に生まれた方々でありますから、オイルショックと言っても生まれしていないから知らないという人が多いわけですね。そのぐらゐ違ふのです。まして昭和三十九年にオリンピックがあつたとか、そんなこと誰も覚えていないのですけれども、そういう時代をずっと過ごしてみると、バブルというのは一時的、一時的なものだと、こういうふうには思いました。

ところが、若い人はそういうことを知らないから、どんどん株というの上がる一方だということでみんなに勧められて株を買った。今なら信じられないですけれども、銀行は使う当てのないお金まで「借りてくれ、借りてくれ」とみんなに勧めたのです。そのぐらゐ金余りだったので、金があるとなに使うか。普通は銀行から借りたお金というのは事業をやったり、何か商売をやったりするためのお金ですから、そんなものはもう要らない。要らないけど、お金は只みたいな利息で貸してくれると言うから、そのお金で株を買ったり、土地を買ったりしたのです。それがバブルであります。バブルがもう萎んでしまつて、今シューンとなつていますよね。その被害をどの会社も受けているわけなのです。バブルの後遺症のない会社などないです。だから、大きな会社の一つや二つはこれからは

だまだ潰れるところが出てくるというような、そういう時代です。

もう一遍言いますと、明治は近代で国家の時代である。昭和二十一年、終戦は民主化の時代であった。今は国際化の時代である。プラザ合意からすでに十何年経っていますけれども、それぐらいの今は混乱期であるわけです。

マスコミを指す人に

そういう中で、マスコミは一体どうするか。この様な状況の中で、これからマスコミを指す人はどういう勉強をしたらいいかということも、これも一つの難しい点なのです。今言いますと、新聞でも報道の他に、例えば新聞小説とか、囲碁とか何かそういうエンターテイメントに属するような記事もありますけれども、本来的に新聞は物事を報道する。最近のように物事が専門化してきますと、もう専門以外のことはまるで分からない。その人達にこういう世界ではこういうことがあるのだということを知らせるのは、新聞、テレビであると思いますが、本来的には新聞というのは報道を中心にずっとやってきたわけです。

そこへいくと、テレビは初めから娯楽性と言いますか、歌もあれば芝居もあるという中で、ニュースという分野もあるということをやってきました。

ラジオでは、今第一放送、第二放送という、あれが中波なのです。その中波に対して短波というのは、短波放送とかいうのがあります。それから、今度はFMというものが出来て、非常に音がよくて聞ける、しかもステレオで聞けるといふFM放送が出来ました。ところが、今はもうテレビが主流ですから、まずテレビの中でも、白黒の

テレビが普及しました。それがカラーになってきました。やがてハイビジョンというものが出来ました。そして最近では、これに加えて衛星があります。この衛星も放送用の衛星と通信用の衛星という、BSとCSというふうに分かれてきました。そしてその上へ今度はCATVというのは、これはもう随分前からありますけれども、CATVという有線によって各家庭にチャンネルを放送する。

ここからは多チャンネルの時代ですね。昨日出来ましたCSによると六三チャンネルから始めて一二〇チャンネルまでこれを増やしていくということですけど、一体そんなもの誰が見るのかというほどのことなのです。ですから、一つの番組に出ますと、こんな私のようなものでさえ、日本でどこへ行っても知らない人がいないというのは、そのためです。これからは多チャンネルになってきますから、あの人もテレビに出ているのかというような時代になってきますね。

ここまでは無線です。

これから一番大事なことは、これは全部アナログでやったわけです。ところが今度はここがデジタルというものが出てきて、これがこれから本流になるだろうと言われた。例えば、テレビにしても次の衛星放送テレビはデジタルでやろうじゃないかということで、NHKも方向転換いたしました。そういうふうになんてきたということですが、ラジオは録音が出来ます。テレビはビデオで保存が出来るといふことで、大体どんなものでも今までは新聞は記録性があるけれども、放送にはそれが無いと、言われたのですが、今はそうではありません。

これから先どうなるのかというと、一言で言いますと、多チャン

ネルとデジタルの時代になってくる。デジタルというのは、ご承知のとおり、今までのアナログというのは全部電波で送っていたわけです。同じ電波で送るよりも、このデジタルというのは数字で送るのです。みんな数字に置き換えて、それを流して、また受像器が数字を映像、音声に戻してやるというやり方です。これは何が優れているかという点、それはどデジタルにすると沢山の情報を一遍に送ることが出来るのです。だから、今度のCSでも六三チャンネルだとか、一二〇チャンネルというような、大きな数多くの多チャンネルが出来る。それで、そのやり方が全部デジタルで送るといふふうになってきますから、皆さん方の中でもこれから先マスコミにお進みになる方は、こういうことだということを一つ考えてやっていただきたいと思うわけです。

その中でももう一つ言いますと、デジタルと多チャンネルとコンピュータの時代にこれからなっていくます。コンピュータを私は全然使えないのですが、皆さんは使うのは当たり前ですね。それだけ世代によって違いというものは出てきているわけです。これは言うてみると、そういう世代の差が新しい技術を呼んでいるし、そこへ男女同権でこのごろ経済部とか、社会部という分野でも女の人が活躍しているという時代になってきました。

デジタル、多チャンネル、コンピュータ、男女同権。女の人の方がこういう世界では感性、感覚的に男の人以上の働きをすることが出来る。そういう意味で、私はこれからマスコミに進出することは非常に意味があるし、また大きいと思います。ただ、マスコミを指している人に言いたいのは、マスコミというのは今も言いましたように、必ずそれは裏があるのです。裏というのは、わざと隠そう

としたりすることではなくて、本当に技術的に、あるいは新聞休刊日だったために、次の反動で記事が大きくなったりと、いろいろなことがあるわけです。私達のように女人になりますと、大体記事を読んでいると、これはどの辺に原因があるのだというのは分かりません。

そういう時代になっても、マスコミを志す人にとって、一番大事なことというのは、これはまず身体が丈夫ということですよ。これは不思議なもので、どんなに頭がよくても、それを支えている体が病気がちだとか、病気になる、これはもう駄目なのです。その逆は成り立つのです。体と胃袋さえ大丈夫なら、少々頭がいかれていても、まあこれは何とかなるのですよ。私が一番いい見本ですがね。四十年間ずっと病気一つしなかったということが今日まで来れたわけですよ。ですから、まず体を丈夫にすることが大事です。

その次に、これはちょっと工夫が要りますけれども、感です。何かあった時に、パァッと感がひらめくようであれば、これは勤まりませぬ。今の皆さんは、何でも全部マニュアルで準備されているから、マニュアルどおりでできや出来ないとこのころがあります。こんなに平和が続いてみれば、もう前例をなくさないように何とかということ、全部マニュアルを作って、マニュアルどおりなら動けるのです。でも、今言ったように、これから国際化の時代、どんどん変わってまいります。山一が潰れたのも、今まで日本のやり方でやってきたから、あれは駄目だったのです。これをもっと実際に、立派にやるようにしていれば、まさかあんな会社が倒産するということはないのです。そういうことですね。だから、これから皆さんにとって必要なのは、マニュアルどおりやるという

ことに加えて、今度何か新しいことに出会ったらそれを上手にこなしていくという、創造性というものが求められるというのが二つ目の大事な点です。

作文の力

それからもう一つは、いろいろありますけれども、体が丈夫で、感がよくて、腰が軽い、いろいろなことがマスコミの人達にはどういう順番を選ぶほうとそれは出来るのです。一番大事なことは、昔も今も変わらなくて大事なことは、作文が上手であるということです。新聞社の試験でも、放送会社の試験でも、何人もワァーッと受けに来るわけです。何人も受けに来て、何を見るかということ、そんな時事問題とか語学なんてものではありません。そんなものは入ってからでも幾らでも勉強出来るのです。何に重点を置くかということ、これは作文に重点を置いて採点をするわけです。

あの作文というのは、本当に不思議なもので、作文のうまい人、下手な人がいます。それからこのごろは、さっきもグリムの発表を聞いておりましたけれども、本当に上手にしゃべります。それを「今度文章にしてみなさい」こう言うと、それはなかなか出来ないのです。幾ら口でうまいことを言っても、それを文章に出来ないというところは、これは致命的です。文章というのは、その人が物をまとめる力、洞察する力、あるいはその人の人柄、全部その短い文章の間に出てくるのです。ですから、もしこの中でもマスコミに進みたいという人がいけば、それはまず文章を練習してください。それにはまずお手本は新聞です。新聞の記事を参考にして、そしてちょっと自分で気に入った文章があったら、それを切り抜いて、それを

まず書き写すことから初めてみることです。そして自分で文章を書いてみるということが大事なのです。

ついで二年ほど前に、ある大学の学生で、NHKを受けたいという学生に「まあ、いいから受けろ」と受けさせたのですが、作文が抜群によかったわけです。今でも覚えていますが、その学生の作文の題は「ふるさと祭りの山」というテーマでした。この学生は富山の出身者なのです。その富山の人がお祭りに女の人まで御神輿を担がせることになったというのが書き出しなのです。「今度田舎の祭りです、いままで全面拒否していた女の人までもどんどん担いでいいというふうになった」ということを書いてある。ヘエーと思って見た。「こんな山奥にまで男女同権の思想が広がってきたのか。それはどのくらい小さな時に、あの御輿を担げないということが悔しかったか分からない。そのために女であるということも本当に悔しいと思った。それが今や男女同権のお陰で御神輿を担ぐことが出来るのだ。」ここまでは第二段です。ところが第三段に、見事にそれをひっくり返すのがあります。それは何かと言いますと、「と、思ってた喜んで祭りに参加したら、このごろは御神輿を担ぐ男の人がいないので、しょうがないから女の人でも担がせるということになったのだ」と見事な三段論法でやっておりました。

私もこの間、伊賀上野の祭りに参加してききましたけれども、まずあのダンジリというのですか、ロウシャと言いますか、山車と言いますか、あの上でコンチキチ、コンチキチとやっている人は、知っている人もいますが人手が足りないのです。もう女の子を含め男の子、それでもまだ足りずによその町から募集して、それでようやくそういう祭りの山車が成立するのです。その山車を引く人も、こん

な人見たことないなと思つたら、「いや、あれは自衛隊の人や」、こ
ういうふうに言いましたけれども、そういう人を雇つてきてまでや
らなきゃいけないというふうに、時代というのは変わつてきている
わけです。そのように変わつていく中で、この時代を敏感に読み取
つて、それを記事にするというのは本当の記事なのです。

だから、さつきも言いましたように、ジャーナリズムというのは
社会の事象の報道あるいは論評というものを世の中に伝える社会的
な活動である、こういうふうに言うならば、正にそういう変わりゆ
く時代をどんどん先取りして、紙面を作つていくということがこれ
から大事なことです。だから作文がうまいということが大事なのです。
これは生まれつきうまい、下手もありますけれども、ちよつと練習
すれば出来ます。

放送のこれから

私がNHKを受けた時は、さつきも言つたようにラジオしかなか
つたのです。私はなぜジャーナリストになろうかと思つたかと言
いますと、これは我々の先輩が戦争中にだらしがなかつたから、マス
コミがしっかりしなかつたから、段々日本が戦争に巻き込まれてい
つたのだ、こんな時代だから、そういう戦争を止めさせるとい
うことでジャーナリストになろうとしたのです。ところが、昭和三十年
というのは、朝日新聞が採用しなかつたのです。今は違うと思うの
ですが、「あの頃は試験を入れてちゃんとした人が偉くなるし、そ
うでない人はずつと下つ端なのです。」そういう身分制度の激しい
会社でありました。今でも多少そういうところがありますけれども、
朝日というのは大体が左翼がかって、気取っている割には封建的な

会社なのです。そういうところがなくなつたというので、本来朝日
に行くやつは他の新聞へどんどん流れていって、大変試験が難しく
なつた時に、そうかそれじゃまあひとつラジオに行つてみようか。
事件があつても、何があつても、ラジオというのはすぐ放送出来る
し、新聞は記事を書いて、印刷して、配るといふような、そういう
大きな違いがあると。これからラジオの速報性ということに生命を
掛けてみようというので、NHKに入ったわけです。

そのころは、まだラジオというので低く見ていたのです。新聞とこ
んなに差があつたのです。

これはアメリカの話ですが、ラジオが初めて来た時に、新聞がい
いかラジオがいいかという論争を経て、今はテレビになつてきた。
テレビになると、何よりも現場中継というのが出来るわけです。そ
うすると、新聞は新聞記者が行つて見て、それを記事にしてとい
うのが、全部中継で、生で絵が入るわけです。

このごろつまらぬ番組でも「生放送です。」とやっていますけれ
ども、あれはちよつと意味がないと思うのですが、やはり生中継で
あればこそ、浅間山荘事件などというのは、まだみんな生まれてい
ないかなあ、三十何時間もずつと中継をしたことがあつたといふ
うに、今でも中継なのです。

もうあと六十日ちよつとで長野でオリンピックがありますね。あ
の滑降コースがすつたもんだして、ようやく四年に亘つたもめ事が
昨日解決をして、ちよつとスタート地点を上げた。あんなのを何で
四年も議論したのだらうと思うのです。そんなのは上げて当たり前
なのです。そのことは別として、全部それをNHKは中継するわけ
です。全種目を中継するのです。そうすると、これは前の札幌オリ

ンピックの時からそうだったのですが、記者が目で見ると、プ
ラウン管を見た方が早いんですね。それとみんなジャンプしてこ
やって飛んでいるのに、そっち向かないでこっち向いてテレビのモ
ニターを見て記事を書いているというような、そういうテレビが優
先される時代になってきました。

今のテレビは不完全です。今の一般のテレビは走査線というのが
五二五本しかないのです。ハイビジョンは一一二五本あるから非常
に鮮明に映るわけです。

人間というのは、一体何であるかということですね。いろいろ捉
え方が出来ると思いますが、人間というのは五感というものがある
ではないですか。五感というのは、目で見ると、耳で聞く耳、鼻で
嗅ぐ臭、舌で味わう舌、それと体で物を触って見る診、その眼耳鼻
舌診というのは、人間の五感です。

ですから、このごろはお香の道が流行っているのも、実はテレビ
や新聞では匂いというのは伝えられないからなのです。まして味と
いうのを伝えられないのです。その伝えられないものを伝えようと
しているから無理があるのです。だから、テレビのあの料理番組を
見ると、何を何グラムとか、いろいろやって、その出来たものを食
べると「うん、うまい」とかなんとか、でも味というのはこれはみ
んなに伝えられないのですね。テレビはまだそういう不完全なもの
です。

匂いも伝えようと思ったら伝えられるのです。それはテレビの受
像器にいろいろな匂いの元になる香料を入れておきまして、それを
ちよっと刺激するとそれがシュッと出て、リンゴならリンゴ、バナ
ナならバナナという匂いが出るのですが、残念なことには今は一週出

た匂いが消えるまでに時間が掛かるのです。バナナの匂いがしてい
るのに、もうこっちは次の次ぐらいまで絵が進んでいるわけです。
そういうことで出来ないのです。眼耳鼻舌診のうち、見るのと聞く
のとしかテレビは本来は出来ないのです。それをみんなが何とか補
っているからだけれども、匂いやあるいは味というのは伝わらない。
皆さんが活躍するころはそういうものまで何とか伝えるような時代
になってくるだろう、と思うわけです。

今、本屋さんに行きますと、いろいろな雑誌がワァーと並んでい
ますね。本場にどういいう雑誌があるかということだけでも大変なこ
とですが、そういう中でも、ここでも発表されました「少年マガジ
ン」と「少年ジャンプ」が遂にひっくり返った。あんなものは私達
から見るとどっちも同じようなものですが、そういう現象が実は起
きているというような中で、放送もまたあの新聞や雑誌ほど沢山の
メディアが生まれてくるだろう。そうすると、どういいうことになる
かという、ニュースだけ朝から晩までニュースを流しているチャ
ンネル、アイスホッケーが面白いから、朝から晩までアイスホッ
ケーの試合をやっているチャンネル、あるいは、俳句なら俳句とい
うことばかりやっているチャンネルというふうに、段々と専門化して
きまして、それが大体チャンネルになってくる。あのNHKの今の
総合テレビというのは、何でもワァーと入ってくるという、そうい
う中から、段々専門的なことになってくる。ちょうど本屋へ行つて
本を選ぶように、これからはチャンネルもまたそうなってくると思
います。

確かにNHKの番組というのはいいけれども、特にお正月とかお
盆とかいい番組をやります。けれどもよく考えてみると、確かにい

い番組だけれども、何でこの番組を日本人は一斉に見ないかという疑問を持ちますね。そうじゃなくて、自分が見たい時に見られるチャンネルということで、今までは作り手と受け手というところで一方的にものを送る時代でしたが、今度は皆さんの方から、私は今ドラマが見たいのだ。私は今ニュースが見たいのだというところで選択することが出来る。この多様化というのは、言葉を返せば選択の時代ですから、そういう選択をしていくということがまたこれからは大事になってくるだろうと思うわけであります。

ジャーナリストとして

ですから、今までのマスコミの私達の立場と、これからマスコミに進んでいく皆さんの立場と違います。仮にマスコミに進まないにしても、作文の能力があるということはこれは大事なことなのですね。これからそういう作文ということが、非常にみんなの力を蓄えることになってくるから、しゃべったことは文章にしてみるとという訓練をされたい、と思うわけであります。

文章に変化をつけることをめり張りを付けると、言いますけれども、その文章にめり張りが付いているかどうかで、その人がどこまで力を持っているかということが分かりますから、そういうこともまたひとつ心がけていただきたい。

それから、いい文章を書くと思うと、構成に力を入れなければいけないと思います。そして文章を書くということがこれからは大事なことになってくるのではないかと、こういふふうに思います。

それからもう一つだけ言いますと、記者とか何とかいうのは、とにかく根あかでも積極的を考える人じゃないと、こういう世界は勤

まらないということも覚悟しておいてください。

それから男女共生ということをよく言われますけれども、それは今まではまだそれでも女性はいれないといけないということで入っていたのですが、これからはもう本当に平等に競争する時代です。NHKでも女の官邸記者というのが生まれました。

ついでに言いますと、官邸というところは入ってすぐの人が行くのです、これが政治部なのです。社会部というのは、まず警察を回るので。それで起こった事件などを取材して、次に難しい問題やる。経済部は、兜町から始まる。兜町というのは、あれは実は一番ペイペイが行くのです。なぜかという、官邸とか警察とか兜町というのは、あらゆるそういう政治なり経済なりの元が詰まっているのです。官邸に行つて何をしているかという、官邸を出入りする人の顔を覚えるのです。今誰が入った、誰が何時に帰った、そうすると十分そこにいたという、ああこれはただ単なる挨拶だな。この人が入ったら二時間出てこなかったという、相当込み入った話をしたに違いないというふうに考えられるのです。

それから、総理大臣は会わないのですが、それ以下の人は全部新聞記者に会うのです。それをまた官房長官の家まで夜明けに出かけていって、官房長官が起きて国会に行くまでの間、ずっと官房長官にくっついて話を聞く、そこまで実はやっているわけです。

ところが、考えもしないことがあったのです。それは社会部には泊まり勤務、泊まらなげやいけないのです。女の子だけ泊めないというわけにはいかないから、女の子も宿泊勤務というのはあるのです。それは男の記者も女の記者も同じようにして簡易ベッドの上で仮眠するわけです。ところが、男の方が困りまして、女の子の方が

その点勇敢ですね。男の子が居ようとなんだらうとバァーッと着替えて、サッと寝てしまおうということで、一時は男の子が不眠症になったという話も聞きましたけれども、そういう中から本当に女性も男性と比較してちっとも劣らないという人が残っていく。

これはアメリカでは、アメリカの軍隊というのは女性が居るでしょ。大多数は医療班とか事務課だとか後方支援なのです。それを「いや、我々も前面へ出してくれ」ということを言った女性がいたのです。何でそんなことをいっているのかというと、いや、前線へ出ないと出世が出来ない、医療班や後方支援ではいつまで経っても出世出来ない。前線へ行けば行くほど出世するケースが多い、だから前線に行きたいのだ」というのです。

そこで、お母ちゃんがイラクの戦争に出かけていって、お父ちゃんも留守番をする、それを子供とお父ちゃんが「いってらっしゃい、無事帰ってらっしゃい」と言ってみ送るといようなこともあるわけで、それだけ女性が一生懸命になっているからなのです。

最後になりますが、そういう点ではナイチンゲールというのは皆さん名前は知っていますね、百年前のイギリスの人です。いまだによく知られているのは、ナイチンゲールというのは、あのクリミア戦争で敵も味方もなく、傷病兵の看護をしたという天使のような人だというのが、大体日本でナイチンゲール伝を読んだ人の感想です。だけど、あの人は敵も味方も区別なく治療したわけではないのです。それはアンリー・デュナンという赤十字の創始者であって、ナイチンゲールはイギリス人しか面倒みなかった。何が偉かったかという点、そういうナイチンゲールは何よりも看護というものを近代化したわけです。そしてこれをやるのが女性の地位を高めるこ

とだということで、一生懸命看護ということをやった結果、今日でも名前を知られている。それからイギリスでもっと有名な、紙幣などでナイチンゲールの肖像、ちょうど日本で言うところの福沢諭吉と同じようなところに肖像が書かれているというのもそのためなのです。

まとめて言いますと、これからはデジタルで、多チャンネルで、しかもみんながその中から選択する時代であるということ、二つ目には女性もまた男性に互してどんどん社会の中で活躍出来るということ。ただしそれには、もう女の子だから、かわいそうだから、女の子も数に入れるというのではなくて、もう男の人と肩を並べても遜色のない、そういう人をこれから期待しているわけです。

私が記者になって、とにかく毎日自分が予期しないことに出会えるということが何よりもうれしかった。毎日が発見の連続、四十年毎日連続してそういう発見をしてきました。発見をすると感動があります。その毎日が発見、毎日が感動だというのが、私のマスコミ論であります。毎日思いも寄らないことに出会えて、そしてそれがまた発見があり、感動がある。その毎日が発見、毎日が感動だというところが、これからもジャーナリストとして一番大事なことなのではないかと思うわけでございます。

(平成九年十二月二日、第三十二回文芸学会講演より)

文責 飯野 守・実川恵子